

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



すっぴり雪化粧の笠岡詰所

(2月14日 撮影)

教祖130年祭に向かって

三年千日 さあ！ おたすけ
祈る 動く つなぐ

立教177年
2月号

年頭会議におけるお話し

一人ひとりが、一つひとつを、

「一、手、一、つ」に

大教会長様

立教177年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長・布教所長らが参集した。先ず1月4日、本部会議所における真柱様の年頭あいさつを拝聴。引き続き、大教会長様は、「積み重ねの年」としての歩み方について懇切に話された。その後、講堂で会食がもたれた。あいさつの要旨は次の通り。

立教百七十七年、明けましておめでとうございます。

昨年は、教祖130年祭に向かう三年千日と仕切つての年祭活動の一年目、「さあ、おたすけ」というスローガンのもと、「祈る動くつなぐ」という実践項目を掲げ、共々に、その徹底を図るべくつとめました。お陰さまで、千200枚余りのお供えから

始まった「おたすけ・お願いカード」も、月毎にだんだん増えて、12月には2万5千枚を超え、笠岡に繋がる人の中に、着実に、

おたすけを願う人が増えてきたということを実感できました。

皆さん方が、真剣に、心一つに揃えておつとめくださった姿ではなかるうかと思いません。本当にご苦労さまでした。

◎「積み重ねの年」のつとめ方

本年は、その勢いでもって、2年目をしっかりとつとめたいと思います。

2年目は、1年目の実践項目をしなから、一歩前進の成人の歩みをするようになります。

ある会長さんから、「おたすけ・お願いカード」のお陰で、おちばがえりする人ができた、初席者ができたという、喜びの声を聞きました。

あるよふぼくが、家人に、何とか神様の話も聞いてもらい、おちばがえりもしてもらいたいということで、この人に何

とか一歩前進してもらいたいという願いを込めて、「おたすけ・お願いカード」を書きました。カードの裏には「おちばがえり」と、してほしいことを書いて、毎日、一生懸命、お願いしたところ、おちばがえりするに当たって声を掛けたら、おちばがえりしてくれた。2回目には、別席を勧めたら初席も運んでくれたということでした。

それが目的ではありませんが、そういう動きに繋がってきたということは、大変有難いことだと思えますし、また、心や身体を動かしてつとめる姿を教祖にご覧いただいて、そういう御守護という形で見せていただくのではなかるうかと思えます。

また、別のところでは、元旦祭で「おさづけの取り次ぎ」をお願いしたところ、帰宅直後、身上の家人におさづけを取り次いだら、鮮やかに御守護を見せていただき、普段、家に居ない子・孫が、その姿を見て、おちばがえりに繋がったということも聞いて、素晴らしい旬だと思いました。

特に教祖年祭の旬には、少しでも、親神様・教祖にお喜びいただけるような心

<実行目標>人のたすかりを願いましょう



おたすけ・お願いカード 集計：25,796枚

平成25年12月21日～平成26年1月20日



累計：159,534枚

遣い・動きをすることによって、何かしら、教祖がお働きくださって、そのような素晴らしい御守護もお見せくださるのだと改めて思いました。

この旬に動いてこそ、教祖がお喜びくださって大きな御守護もくださるということをしつかり心において、教会に繋がるよふぼく・信者、一人でも多くの人に声を掛けるようにおつとめいただきたい。

◎「祈る」

さて、「成人目標」Ⅱ「さあ！おたすけ」、これは何も変わりません。そして「祈る動くつなぐ」、これも変わりません。

ただ、「祈る」の動きに對して、1年目は「人のたすかりを願ひましょう」ということで、「おたすけ・お願いカード」を通して、とにかく、「願う」ということを基本的につとめました。

2年目、同じように「願う」のですが、今度は、「願う」を「行ない」・「実働」



「一手一つ」を促される大教会長様

にする。「たすかりを願う」だけではなく「たすけをする」行ないに繋げようということですが、そういうことで、「たすかりを願ひましょう」に加えて、「教会で毎月何回のおさづけをお取り次ぎをさせていただきましょう」と掲げて、細かな実践項目が掲げられています。ですから、1年目と別のことをするのではなく、1年目のことをしながら、2年目のことを積み重ねるということ、2年目は「積み重ねの年」と位置付けてつとめたいと思います。

毎月のおさづけ取り次ぎ回数は、大教会では特に決めていません。それぞれの教会で決めて、これを実行したら結構です。大教会の直轄では、1月は、私が数を決めたが、2月からは、毎月、皆の心定めを持ち寄って、それを直轄の心定めとして、「1月に何回おさづけを取り次げたい」と御礼申しあげ、「2月はこれだけの心定めです」とめます」ということを、毎月、直轄祭の祭文で奏上する。

月毎のおさづけ回数として、これが、1月より2月、2月より3月と、だんだん増えてきたらいいということ、1月をちよつと少なめに設定しました。

これは、それぞれの教会にに応じてすれば結構ですが、回数を競うわけではありませんから、数が多ければいいというわけではありません。

「おたすけ・お願いカード」によって、毎日、一生懸命、お願いをする。その延長線上で、「これだけお願いするなら、せめて、おさづけを取り次ぎたい。1・2回で御守護いただけなければなら、回数を重ねてお願いしよう。」という、一人ひとりのたすけ心の積み重ねの上でのおさづけ取り次ぎ回数ということ、皆さん方の教会に繋がるよふぼく・信者一人ひとりの真実の心定めを毎月して、実際に実働に移ればありがたいと思います。

それぞれの教会の実情に応じて、毎月同じ回数でも、違う回数を心定めしても結構ですが、会長さんが勝手に決めるのではなくて、教会に繋がるよふぼく・信者の皆さんに言葉を掛けて、皆さんの心定めの数をする方が「一手一つ」ということに繋がるだろうし、また、教会に繋がるよふぼく・信者さんが、それに向かつて、より一層、真剣に実働してくれると思います。ある教会では、「おたすけ・お願いカード」でお

願いする中に、どうしても、その人に助かってもらいたいということで、わざわざ、会長さんに、電話でおたすけをお願いされた方もおられました。おさづけをよう取り次がないよふぼくや、拝戴していない信者さんでしたら、おさづけの取り次ぎを人にお願ひしても、それも「1回」ということになります。

そういうことも含めて、皆で心定めておつとめいただければありがたい。

「論達」にも、最初に「一手一づ」ということが述べられていますが、教会に繋がる者、よふぼく・信者、すべての人が、同じ思いで動くところに、今回の「論達」の思いが関わっていると思ひます。

どうぞ、皆さん方には、自分がするだけではなく、よふぼく・信者にしっかりと声を掛けて、共々にしていただけるように、ご丹精をお願いいたします。

◎「動く」

続いて、「動く——一日一つひのきしん」に、今度は、加えて、「毎月何件にをいがけ」——にをいがけもひのきしんの一つです。

これも、それぞれの教会で決めて、実践すれば結構ですが、会長さんが決めてしまうのではなく、「1件」でもいいので、一人ひとりに声を掛けて

確認してください。

教祖にたすけられた人がご恩報じしたいと教祖に申したところ、

「人を救けるのやで。」

と、仰せられた。それで、「どうしたら、人さんが救かりますか。」と、お尋ねすると、

教祖は、

「あなたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」

と、仰せられ、……

(逸話篇100)

ですから、不思議な御守護をいただいた人は、「神様に助けていただいた。ありがたい。」という人を人さんにお話しただけでも、これもをいがけです。これも「1件」。

かしかも・かりものの理が十分に分かって、毎日「神様のお陰で、これだけ結構に。ありがたい。嬉しい。」という心があれば、その喜びを人に伝えるだけでも、これも、同じく、にをいがけ。ですから、パンフレットを持って「天理教です」と声を掛けることだけがにをいがけではありません。

それぞれができるように心定めし、また、これも、毎月、祭文に入れて、つとめてもいいと思ひます。

いずれにしても、それぞれの教会で、教会のやりやすいように、心定めの数を出して、おつとめ

いただければ結構です。

◎「つなぐ」

3つ目の「つなぐ」については、「進んで声を掛けましょう」に、今度は、加えて、「教えを学び信仰の楽しみを身に付けよう」。

先ず、家庭内において、教理の勉強をする。

もちろん、『教祖伝』や『教典』のような書物を読むことも、一つの方法でしょうが、一番、皆さん方にお願ひしたいのは、家々の信仰の元一日、これを、子・孫さんたちに、お話しする、あるいは、そういうことについて、家族で、話し合いをするということ。そういうことをしていただければありがたいと思ひます。

最近、特に高校に進学する人たちにお話しするのは——中学校までは親の心通りの守護の中で子どもは生かされているが、15歳(高校)からは銘々自分の心通りなので、自分の「いんねん」で生きていかなければならない。当然、自分の足を踏ん張って、大地に根を生やして、自分が、これからどういう人生を歩んでいくかということも考えて進んでいかなければならない。高校時代は、ちょうどそういう時期なので、大地に根をしっかりと生やすことが一番大事だ。「大地に根を生やす」とは、親が「大地」なのだから、親々の歩み方、親々の心、元を知ると、親を知ることが、

「根を生やす」ということになる。元を知れば、自分がどういう方向に進んでいけばいいのかが分かる。元を知らなければ自分の行くべき道筋は、決して分からない。だから、しっかりと、親を温ねなさい。教会であれば、信仰の元一日を温ねなさい。——という話をします。

だんだん大きくなってしまつて、もう、自分で勝手にどこか分からない大地に根を生やしてしまつてからでは、話をしても、なかなか、聞き入れにくい。

いずれにしても、そういう機会を設けて、お話しする。——それが大事な「旬」なのです。

この2年目の成人目標は、そこにありますから、今年は、子・孫さんたちと話す「旬」だということとを心において、信仰の元一日、親々の信仰に対する思い、信仰を通しての親の子どもに対する思い、そういう一つひとつを、しっかりと、話をする機会Ⅱ「旬」にさせていただければありがたいと思います。

そして、それ以外には、いろいろ、おちばからの刊行物がありますので、そういうものも大いに利用しながら、「縦の伝道」の御用を、しっかりとつとめたいと思います。

◎一人ひとりが、一つひとつを、「一手一つ」に

あとの細かい項目は、これを「全部やれ」とい

うことではなくて、実際に関わる一つひとつだということ、皆さん方が、それぞれに確認しながらつとめていただきたいと思ひます。

昨年、一年掛かつて、「おたすけ・お願いカード」は確かに増えてはきましたが、「徹底」というところまでは行ききれていないと思ひます。

真柱様は、年頭のごあいさつで、昨年を反省して届かないと思つたら、今からでも決して遅くはない。さあ頑張つてつとめようと声を掛けてくださいました。

今からでも、決して遅くはありません。

昨年、徹底できなかったと思えば、今年一年、しっかりとつとめたなら、2万5千枚が3万・4万枚という形で——枚数が増えるのではなく——おたすけを願う人が、どんどん増えてくるということが、大事なことだと思ひます。

どうぞ、その徹底が図れるように、皆さん方には、しっかりと、心一つに揃えて、おつとめいただきたいと思ひます。

中には、「うちの教会は、うちの教会のやり方がある」というような「こだわり」もありましよう。「こうやって丹精し、おたすけしていく」という「こだわり」を持つことは大切ですし、「こだわり」を捨てる必要は全くありません。

しかし、それはそれとして、それもしながら、これも確実にやってほしい、ということだけは申

したい。「こだわり」があればあるほど、プラス、これも、合わせてつとめたなら、より、「こだわり」が生きますよということは申したい。

私たちは、教祖130年祭に向かつて「一手一つ」つとめることよつて、神様から、より大きな「旬」のお働きをお与えいただけますので、どうぞ、心を揃えておつとめくださいますようお願い申し上げます。

また、3月から6月に掛けて、本部主催の「ようぼくの集い」が開催されます。

これも、自分だけが行くのではなく、よふぼく、信者、端々にまで声を掛けて、どこでもいいから行きやすい場所・行きやすい日にち、遠方の人にも、先ず、声を掛け、できれば、遠方であっても、足を運んで、そして、参加してもらえようように声を掛けていただきたいと思ひます。

これも、たすけ心を遣う大きな糧になる内容です。それ、それも楽しみにしながら、共々に声を掛け合つて、一人でも多くの人に参加してもらえよう丹精をしていただきたいと思ひます。

今年一年、別席・ひのき・しん団参、また、各部・各会のいろんな行事がありますが、それら一つひとつも、すべて、年祭活動の一環としてつとめられる事柄ですので、自分のできるところを精一杯つとめて、今年一年、2年目に相応しい成人の歩みにしたいと思ひますので、どうぞ、よろしくお願ひいたします。

春季大祭講話

御存命の教祖に

お喜びいただきました

大教会長様

立教177年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よぶぼく・信者ら多数の参拝のもと執り行われた。大教会長様は神殿講話で、教祖にお働きいただいてこそその「存命の理」であることを、順を追って話された。要旨は次の通り。

○「教祖存命」という言葉のニュアンス

今日は、春の大祭にちなんで、「教祖存命」ということについて、お話ししたいと思います。

「教祖存命」ということの意味は十分に分かりませんが、私は、どうも、「存命」という言葉の遣い方が余り好きではありません。

昨年、母が亡くなりましたが、それまで多くの方が心配をしてくださいました。

近くの方は「お母さん、お元気ですか？」と尋ねられますが、普段、接する機会がほとんどない方や、昔、お付き合いのあった方の中には、元気がどうかではなくて、居るかどうか(生死)が心配

で、「まだ、ご存命ですか？」と尋ねられる方があります。

ということは、「存命ですか？」という言葉は、普段、接しない方が、生死の確認のために遣う言葉のような気がして、「教祖御存命」というと、何か、普段、教祖に接していない、あるいは、教祖と縁遠くなってしまっているような気がします。

普段から、教祖が居られるという感覚でいいますから、敢えて「御存命」と言われると、却って、何か、違和感をすごく覚えてしまいます。

教祖が御身を隠されてもうすぐ130年経ちますから、当然、私たちは、教祖のお姿そのものを見たことはありませんから、「存命の教祖」という表現が出てきても致し方ありませんし、また、教祖を想像するとしても、なかなか難しい。

例えば、私の母なら、生前の姿を見ているから、何年経つても、こんな母だったということが分かると思いますが、残念ながら、私たちは、教祖の姿を、直々、見たことはありません。

ですから、どうしても「存命の」という表現をしなければいけないのかも知れませんが、敢えて言わなくても、既に存命であるということを、私たちは、しつかり心においていかなければいけない、それが、教祖だということを、改めて、今日

は、お話しできればと思います。

○「教祖存命」の理

教祖が月日のやしろとなられ、親神様が入り込まれて、直々、おたすけに掛かれた。

その当時の人々にしてみれば、親神様は「天の神様」、教祖は「地上の神様」——別のものではありませんが、「地上におわす神・をや」という感覚ですから、親神様よりも、教祖の方が「神様」だという、何か、そういう感覚があつたろうと思います。

教祖にたすけていただき、親神様の存在や教理を教えていただいた。教祖によって、すべてのことを聞かせていただいたので、当然、当時の人々にしてみれば、「親神様」は一般的な「神さん」で、「教祖」が、身近に、すぐ側に居られる「神様」の姿でした。

教祖が「神」そのものだったので、明治20年、教祖が御身をお隠しなされた直後は、目の前の教祖が、息を引き取ったという姿から、当然、「亡くなった」「居なくなつた」・もうこれで、神様が、私たちをたすけてくださることはない・「陽気ぐらいに導いてくれることはない」という感覚でした。

『教祖伝』第十章に

人々は、全く、立って居る大地が砕け、日

月の光が消えて、この世が真っ暗になったように感じた。……飯降伊蔵を通してお指図を願うと、

……子供可愛い故、を、やの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しつかり見て居よ。今までとこれから先としつかり見て居よ。……

と、お言葉があった。

このお諭しを聞いて、……姿をかくして後までも、一列たすけのために、存命のまゝお働き下さるのか、それならば、と、一同の人々は漸く安堵の胸を撫で下ろした。

さあ、これまで住んで居る。何処へも行ってはせずに、何処へも行ってはせずに、日々の道を見て思やんしてくれねばならん。(明23・3・17)

……今も尚、そしていつくまでも存命のまゝ、元のやしきに留まり、一列子供の成人を守護されて居る。日々に見られて来るふいぎなたすけこそ、教祖が生きて働いて居られる証拠である。(伝第十章)

とあるように、教祖はどばに留まり、世界だすけの上にお働きくださっているという理——「教祖存命」ということを明らかにされました。

だからこそ、教祖が御身をお隠しなされたからには、どうしても、教祖にお働きたいだかなければ

ならない。そのためには、私たちが、しつかりとおつとめをして、にをいがけ・おたすけの上に励まなければならぬ。そうして、一生懸命、つとめる中に、不思議なたすけが次々と現われてくる。この「ふしぎなたすけこそ、教祖が生きて働いて居られる証拠」だということが、より心に納って、「療原りょうげんに火を放つがごとく」おたすけに邁進するという姿になったということです。

○「おやさま今も御存命」

教祖は、130年経とうとする現在、姿は見えませんが、同じようにお働きくださっているということとです。

これにつきましては、
存命々々と言うであろう。存命でありやこそ日々働きという。(明29・2・4)

影は見えぬけど、働きの理が見えてある。これは誰の言葉と思うやない。二十年以前にかくれた者やで。なれど、日々働いて居る。案じる事要らんで。勇んで掛ければ十分働く。

(明40・5・17)

つまり、私たちは、教祖のお姿を拝することはできませんが、私たちが、一生懸命つとめることによって、にをいがけ・おたすけの上にお見せいただく不思議な御守護こそが、実は、教祖のお働きだということ——これを、しつかりと心におい

て——少しでも教祖を感じるために、おつとめをしつかりつとめ、にをいがけ・おたすけ、おさづけの取り次ぎにと、しつかり励まなければならぬと思います。

○「本部教祖殿での」奉仕

ご本部では、「教祖殿」で「生前同様」——お姿があるときと同じように、毎日、教祖のお接待をしておられます。

これについて、中山もと奥様(二代真柱様の娘さん、前の真柱様のお姉さん)が、「おやさまのおはなし——教祖の一日」というものを書いておられますので、紹介いたします。

教祖の一日の御日課は、朝勤のお出ましから始まります。一日の時間の過ごされ方は一年中を通して一定ではなく、朝勤と夕勤の時間が基準になります。

朝は朝勤三十分前にお目覚め頂くのが普通でございますが、元旦祭の時には、お勤が午前五時から始まりますので、午前四時にお目覚め頂き、まず御入浴になります。そしてお勤にお出まし頂きますよう心掛けさせて頂いております。

しかし、普段は、朝勤三十分前にお目覚め頂き、次いでお化粧室へご案内させて頂きますと、御洗面、御髪上げなどをなさいますの

で、そのお手伝いをさせていただきます。次いでご休息室で朝のお茶を召し上がり、再びご寢室へお戻り願うと、お寝間着から御普段着にお着替え遊ばし、それから御殿にお出ましになります。この時間は大体朝勤十分前位です。

※「お出まし」の際は、閉まっていた襖が開く。次いで午前中御殿にお出ましの間に、春夏秋冬、時間の頃合いを見計らってお居間へ御案内して、お四つを差し上げますと、召し上がって下さいませ。

※教祖殿合殿から参拝して、正面が、教祖の「御殿」、左手(「御殿」の左側)が「お居間」、お運びの時のお部屋。

次いで又、御殿へお戻りになり、午前十一時になりますとお昼食を差し上げます。お昼食の時間だけが年中変わりございません。お朝食の時間は朝勤の時間の後。お夕食は季節によって夕方に召し上がって頂けるように時間が変わります。

お昼食を召し上がられますから、しばらくして、御入浴の時間になりますと、又お化粧室へ御案内し、その御入浴中に御殿掃除をさせていただきます。御入浴に引き続いてお八つをお居間で召し上がられます。その後、再三御殿へお戻りになります。

次いでお夕食、それから夕勤後、大体一時

間から二時間の間に、というのは旬によって、又、お祭り日によって時間が変わりますが、その一時間から二時間の間に御就床願います。

これが教祖の御日常の主な日課でございますが、教祖が御殿にお出ましになっておられる間、お一人ポツンとお座りになっておられるわけではございません。

御供を作る御洗米を御供えいたしましたら、その御洗米に息をかけて下さり、又、結婚式にもお立ち会い下さいますし、御用場で講習会等が開かれます時にもお立ち会い下さいます。真柱様のお運びがございます時にはご一緒に御殿にお座りになっておられます。殊にいつも参拝に来られる大勢の信者さんの方々、つまり皆さま方が、教祖に御挨拶申し上げられます時、その御挨拶をお受け下さり、悩み事や痛み事など、救いを求めて来られる方々には、その救いを頂き易いようにして下さいませ。

つまり、私共が参拝の後で、心に浮かんだことや、見せて頂くこと聞かして頂くことは、すべて教祖の私共のお尋ねに対してのお返事なのでございますね。

教祖の一日はこのように少しの間もお休みにならずに、たすけ一条にお働き下さいます。

「世界映してみせる」とおっしゃったのは、そういうふうにしてお働き下さるのですね。

(中山もと著『おやさまのおはなし』) このように、そこに居られるように、お身体があるように、お着物も着ていただき、御入浴もしていただき、お布団にも入ってお休みいただくということですよ。

○身近なところでの「奉仕」は？

大教会では、なかなか、そこまでのことはできませんが、少なくとも、教会名称には、親神様だけではなく、教祖もお出張りお鎮まりくださっているという思いは、日々の中で、心におく必要はあると思います。

普段、大教会においても、献饌やお灯明をお下げするときは、親神様のものを、教祖の直前を素通りして上げ下げするのではなくて、一旦、下段まで降りてするようにしています。

これは、「祭儀式」だからではなくて、そこに教祖が居られるから、教祖の直前を右往左往すると失礼だと感ずるからです。

お掃除のときは、なかなか、そうもいきませんし、教祖のものを、教祖の横から下げる分は、別に何ともありませんが、親神様のものを上げ下げするときに、教祖の直前を、素通りするというのは、これは、申し訳ないことです。

決して、祭儀式だからではありません。

以前の話しですが、夏場になると、朝のお掃除が朝づとめ一時間前の4時から始まりますが、掃除の準備をするためには、その前から起きなければいけませんので、ご自分がお休みになる前に、障子を全部開けて、箒なども前晩から準備される方がおられました。

私は、「障子を開けっ放しにしたら、教祖が安心してお休みになれないから、朝になってから、障子を開けて、道具を用意して、掃除してほしい。夜は、ちゃんと障子を締めてほしい。」とお願ひしたこともありました。

姿が見えないから居られないのはありません。もちろん、常に、ジツとしておられるということでもありません。

常に、私たちよぶべくと共に居てください、「さあ！おたすけ」というときには、ちゃんとお働きくださいますから、常に居られるのと同じ思いで接することが大事だと申したいのです。

○肌で感じる御存命の教祖

本部の教祖殿でそうしていても、目に見えないものを「御存命」とは、なかなか思ひにくい、にわかには信じられないという方もおられますよ。

ある方から聞いた話しですが、教祖のお側にお仕えされる方が、御入浴に当たって、お風呂のご

用意をされたところが、思わずも、熱いお湯になってしまったようです。「ちよつと熱いけれども大丈夫だろう」ということで、ご用意が済んで自宅に帰ってみると、子どもさんがお風呂で大火傷して、大変なことになったということがあったそうです。

そのことで、お風呂をご用意された奥さんは、「大変、申し訳なかった」と、「姿が見えないからと思っていたが、正しく、教祖は御存命で、こうして、本当にここに居てください」ということを、改めて、しみじみと分かってからは、一生懸命、つとめていくことを聞きました。目に見えないから居ないのではなくて、目に見えなくても教祖が居られるということです。そして、教祖にお働きいただくためには、私たち一人ひとりが、しっかりと、おつとめ、たすけ一条の上に運ぶことが大事だということです。

○教祖にお働きいただける2年目に

明治20年におつとめが済んだときの教祖は、元の理に、

三度目の宿し込みをなされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経つて四寸まで成人した。その時、母親なるいざなみのみことは、「これまでに成人すれば、いずれ五尺の人間になるであろう」と仰せられ、につこり笑う

て身を隠された。(典第三章元の理)と示されるいざなみのみこと様と同じお心持ちだったと拝察します。

ニッコリお笑いになった、そのお姿は、「一れつ子どもが、自らの意志でおつとめをつとめた姿が、陽気ぐらしの世界に近づく第一歩になった」という、をやの大きな喜びだったろうと思います。おつとめだけでは、陽気ぐらしには立て替わらない。現身を隠すことによっておさづけを授け、より一層、私たちのたすけ心を遣わすことによって、陽気ぐらしの世界に近づく。

しかし、おさづけを取り次いでも不思議も何も現われなかったら、信仰に繋がってくる人もないわけでしょう。

お取り次ぎするおさづけの一つひとつに、教祖がお働きくださり、不思議・自由の御守護を現わすことによつて、より、親神様の御守護・お働き、たすけてやりたいという親心さえも分かって、ご恩報じの道を歩みたいという人が、次々と増えてくる。

それが、今日のお道の姿、そして、これからの世界の姿になっていくのではないかと思います。

教祖年祭の旬は、教祖が十分に働いてくださる「旬」です。

改めて、この旬は、三年千日と仕切つて、しっかりと、をやに喜んでいただけるように、また、

をやにお働きたいだけるように、つとめ切るとい
うことが大切だということを、皆、共々に、心
においてつとめたいと思います。

共々に、お願いカードで、一生懸命、たすかり
を願ひ、そして、今年は、1回でも多くのおさづ
けのお取り次ぎ、1回でも多くの声掛けをして、
1年目より一つ成人した年祭活動にしたいと思
います。

2年目、勇んでつとめさせていただきましょう。
どうぞ、よろしくお願いいたします。(拍手)

こころの詩

・弥高山分教会教人 藤本節子さん

月あかり外燈あかり背に受けて

かげ絵追ひつ、朝参りかな

笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていました
ので転載させて頂きます。おめでとうございます。

▼養徳社発行『陽気』誌二月号、「道柳」より転
載。今回の課題は「心」。

▽佳 詠

・東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん
人だすけ心ひとつで生まれり

▼表紙写真 (上原喜三 詠所掛員)

温故知新

いきいきエピソード 33

事歴はしのび詞(承前)

斯くて昭和二十六年三十年の長き歳月に
亘りて務め給ひし 笠岡大教会長の理を譲り
ては 祭事室神殿掛 検定会委員 布教部布教
三課長など おやしきの務めに只一条に務め
労き給ひ 昭和三十七年大江大教会世話人 山
形教区修理人として 只管に教祖ひながたの
道を辿り 人々を教え導くと共に 地方教会修
理丹精に格勤み励み給ひぬ

更には昭和四十五年四月十八日教祖誕生祭
の佳き日 本部長に登げ用いられては つとめ
人衆として元つちばのの重しき勤めに格勤み
給ひ 検定会委員 審判会委員など老いの身も
返りみず身も柵知らに努め励み労つき給ひ
ぬ 更に想ひ廻せば 三度に亘りて台湾伝道序
長として 又梅華会親善訪問団団長として十
指に余りて台湾の地に赴き 斯く道の御教え
を伝え教え導きて 日台親善に尽力されし功
績は 多くのの人々の胸に深く感銘を与え今も

尚尊く光り輝きて 後の世かけて伝うべきい
みじき御功績の一つにはありけり

斯くては元つちばの教会の勤めに寄る年波
も忘れて 労つき努め締まりてあり来しを 如
何なる枉事にや 去りぬる年の霜月二十六日
俄に御身損ない坐して 只管に身を養い坐して
ありけるを 医者の手術もその効だになく 如
何でか日を経るままに篤しれ坐して 元の御
姿に復り給わん日をこそ思い頼みてあり経し
に、この月の二十二日午前五時三十五分と云
うに御齡九十歳を生きの涯りと逝く水の返ら
ぬ如く 果敢なくも出直し坐しぬるは 惜しみ
ても尚余りあることになんありける 故れ一
世の終いの御祭仕え奉る これの齋場に親族
家族は更なり 参来列なる諸人達と共に 愁い
歎かう中にも 汝主の高く広き御遺徳の千千
の一つを 言挙げ讃えて しのび訶告し奉らく
を 御心を甘らに聞食せと白す

以上である。しのび詞は出直し後直ぐの作
文なので 多岐に亘る困難はあるが その方の
この世でなされた主立つ功績 印象深い人格
などが一番反映されやすいものと言える。特
に親しかった人の手になる「しのび」はまこ
とに得難いものである。(前史料部長)

上原繁雄 大人三十年
上原くにゑ 刀自二十年
上原郁雄 大人二十年祭 執り行う

笠岡大教会三代会長・本部長 上原繁雄大人三十年祭、三代会長夫人・本部婦人くにゑ刀自二十年祭、四代会長・上原郁雄大人二十年祭が、1月30日午前11時から、大教会世話人・島村廣義本部長・齋主のもと大教会祖霊殿で家族、親族、大教会役員、部内教会長、布教所長、よふぼく、信者ら多



年祭祭文を奏上される島村廣義先生

数が参列し執り行われた。

年祭祭文奏上の後、家族、親族、そして大教会役員、部内教会長、よふぼく、信者の代表が参拝した。

当日、来賓として、芦津大教会長様(代理)、玉島大教会長様ご夫妻が、親族として、高知大教会長様夫人、池田大教会長様・前奥様、大江大教会

長様ご夫妻、中紀大教会長様が参列された(参拝順)。

年祭齋員は次の通り。

- 齋主 島村廣義先生
- 指図方 中村 剛
- 扨者 中島誠治 門脇元教
- 賛者 森本忠善 佐藤真孝

勇んで餅つきひのきしん

12・26〜27 詰所

恒例の詰所餅つきひのきしんは昨年12月26日の準備に続き27日に行われ部内教会長をはじめ有志、少年会員など約40人が参加した。27日曇り空の中、午前7時半から力強い掛け声と共に和気あいあいと行われ、10時過ぎには本部へのお供え用の5升餅28個、正月用小餅などが搗きあがった。26日、大教会から牡蛎、島根分教会から蟹の差し入れがあり参加者で賞味、27日のひのきしん後は、



力強い掛け声と共に搗きあがった

森本重吉さん夫妻(海松ヶ岡分)から特製うどんが振る舞われた。

(本年1月号掲載予定でしたが誌面の都合上、割愛させて頂きました)

教会長講習会開催

1・17〜18 高屋分

高屋分教会(武内正美会長)では1月17、18日の両日、同教会で立教177年教会長講習会を開催、22人が参加した。

同教会につながる教会長が一手一つに歩むため毎年開かれているもの。

武内同会長が「年祭活動2年目の本年、教会の竜頭である教会長がまず先頭に立って新しい歩みを進めさせて頂こう」とあいさつ。

引き続き、松尾眞理子先生(加古大教会長代務者)が大教会長の身上を通して「大教会長さんに何としても助かって頂きたいという思いから、日参をはじめ、おさづけの取り次ぎなど人の助かりを願うての助けの輪が教会に広がっていった。今はこれまでより一步、行動を外に踏み出す旬であり、無駄のように思える働き、種まきこそ、親神様がご守護を持って来て下さるものになる」と講話。

翌日は参加者を4班に分けて同教会の年祭活動スローガン。おさづけの取り次ぎ。百万軒をいかけ。一教会で一年間に一名の修養科生の御守護を頂こう。道の後継者の育成——などについてねりあった。その後、大教会まで拍子木を入れて神名流しを行い、新たな歩みを胸に閉講した。

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には一列の子供がかわいい上から 天保九年十月教祖を月日の社とお定めになり 教祖を通して万一切の真実を明かされると共に 陽気ぐらし実現の為の「ひながた」を五十年の長きに亘つて親が直々にお通り下さいました 加えて明治二十年一月私達一列の子供の成人を促す上から二十五年先の定命を縮めて教祖のお姿をお隠しになり「ひながた」を通りやすいようにと「つとめとさづけ」をお渡し下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます 真実の親心に触れた先輩先生方の真実に導かれこの道にお引き寄せ頂きました私共は 教祖百三十年祭の旬の理も得て 日々は報恩感謝の心一杯に朝に夕に御礼申し上げつつ 自らの助け心をより高めるべくたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております

その中にも今月二十六日は教祖が世界ろくちに踏み均しに出られた尊い日に当たり おぢばでは春の大祭が執り行われますので 当教会に於きましても只今からおつとめ奉仕人一同始まりと納まりた理に込められた親の思いを思索し心に修めつつ 明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には今日の日を大切と寒さ厳しき中も厭いませず寄り集いました道の子供達が二万五千七百九十六枚のおたすけお願ひカードと共に より一層のたすけ心で参拝する真実の状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本年は 教祖百三十年祭に向けて三年千日と仕切つての年祭活動二年目でございます 笠岡では二年目の成人目標として一年目の上に積み重ねの年と位置付け たすけを願うからたすけの実働へと一歩前進させて頂きます 「祈る」の実践項目ではそれぞれの教会で月毎のおさづけの取り次ぎ回数を中心定めて実践 「動く」では同じくをいがけ件数を心定めて実践 「つなぐ」では教えを学び信仰の楽しみを身に付けるべく家庭内で信仰の語り合い等をさせて頂きます 加えて本部主催で三月から六月にかけて実施される「ようぼくの集い」に全よふぼく信者の参加を目指して 教会長よふぼく信者お互いが声を掛け合せて参加させて頂く所存でございます

何卒親神様には旬々に与わる御用を御恩報じの手だてとして真実一杯に努める皆の誠の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上にも更なる自由の御守護を賜り 一人ひとりのたすけ心が大きくなり 人から人へと伸び広がって御恩報じを願う人が増えお待ち望み下さるおつとめ奉仕人の増員が果たせまますよう御守護お導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

<神 事 部>

○春季霊祭に伴なう合祀について

- ・ 3月22日午前9時半より
阪本末子姉(おつとめ奉仕人)・西村道榮姉(瑞雲)
- ・ その他、教会長配偶者・よふぼく・信者等で、合祀を願い出られる場合、3月18日までに神事部長へ連絡してください。

<詰 所 掛>

○教祖誕生祭詰所受け入れひのきしん

- 期 間 4月17日(木) 昼食~19日(土) 昼食
割 当 西・福山・高屋・島根・上府ブロック 各1名(計5名)

<少 年 会>

○鼓笛合宿

- 日 時 3月30日(日)~4月1日(火)
午前9時 係員集合
午後1時 受 付
午後1時半 開 始
参加御供 1,000円、お米3合

○おつとめまなび総会

- 期 日 4月1日(火)

<雅 鶯 会>

○雅楽勉強会

- 日 時 2月23日(日) 午前9時 受付
9時半 開講式・講習
午後3時半 閉講

- 会 場 大教会
対 象 初心者・初級者(少年会員、一般)
内 容 初心者は、雅楽の基礎から勉強を、また初級者は平調の越殿楽が合奏できるよう勉強します。
講 師 大教会雅楽奉仕者
参加費 300円
申し込み 2月20日までに大教会に申し込み
※楽器は各自持参ですが都合がつかない人はご相談に応じます。

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事 等々

字 数

1000字前後(800字~1200字) 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は一句からでも結構です。

寄 稿 先

下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵 便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：tenkasa@yahoo.co.jp

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



立教百七十七年 春季大祭 祭典役割表

胡弓	三味線	琴	小鼓	すりがね	太鼓	拍子木	ちゃんぽん	笛	てをどり	おつとめ	地方	役割		講話	祭主	扨者	
												区分	区分				指図方
上原順子	今川佐智子	虫明好美	今川昌彦	内海史郎	中島誠治	吉岡誠一郎	森本忠平	杉原博之	門脇郁子	田中ますみ	大教会奥様	上原繁道	岡本久善	大教会長様	大教会長様	岡崎真一	門脇元教
森本富美子	三島照美	佐藤香苗	赤木素志	上原浩	岡崎輝彦	高木昭祥	横山逸郎	吉岡誠一郎	谷内美知子	内海安子	武内正美	上原志郎	岡崎真一	三月講話	中村道徳	横山逸郎	岡本久善
高木孝子	中村初美	門脇加津	森本忠善	渡邊隆夫	浅野明教	田林久嗣	佐藤真孝	虫明立生	横山小智榮	笹尾一美	岡崎豊子	田中隆之	門脇元教	三島	中村道徳	横山逸郎	岡本久善
														三島	中村道徳	横山逸郎	岡本久善

大教会だより

◎教人資格講習会修了者

立教177年2月10日終講
 稲倉 浅野 壽賀子
 稲倉 迫田 勝子



1月17日は忘れもしない阪神淡路大震災の日。19年目。私は10時頃、早朝に震災犠牲者の慰霊と鎮魂の行われた神戸三宮の東遊園地公園に行く。毎年この日は亡くなられた方々の慰霊に行く。教会にじっとしてられない気持ちになる。その場所は今後も出来事に似合わないあついたら

かんとした昼前の明るい陽射しに包まれていた。竹灯籠、竹を斜めに切つてその中にろうそくの灯りが点いている。「祈、愛、心」と偲ぶ言葉や祈りの言葉が書かれている。人々は歩き、また立ち止まり、合掌している人も――。唯、話し声はほとんどない。報道陣かな、大きなカメラを持っていて。10台以上の大型バスが停まっている。どこから来たんだろう。私は唯、歩き回る。何も考えていない、頭の中は空白と思う。唯、無性に歩き回る。亡くなった方々の中に私や家族もいたのかもしれない。震災から生まれた「きずな、支えあう心」を次世代に引き継がなくてはならない。30分程の空白のときは過ぎて黙々と教会に帰る。神前で深く祈る。これからもその日はじっとしていられないだろう。(ひ)

